

2023年6月7日(水) 14:00-16:00 @シネマ・チュプキ・タバタ シアター 参加者：4名

テーマ 『音の映画』について語らう

ゲスト ハブ ヒロシさん (映画監督)

参加者へのメッセージ

“ 今回は、前回鑑賞した『音の映画 Our Sounds』の「鑑賞体験」に焦点を当てて、みなさんと語りたいと思います。

同じ場所で同じ時間を過ごした私たちの「体験」と言っても、

暗闇で鑑賞したひと／字幕で鑑賞したひと

ギャップを感じたひと／感じなかったひと

映像が浮かんだひと／浮かばなかったひと……、様々でした。

そもそも「ユニバーサル」とは何でしょうか？

普段、作る人、届ける人として活動していらっしゃるみなさまが、ご自身の活動と今回の体験を重ねたとき、どんなことを感じたのでしょうか？

対話に際しては、前回十分に共有できなかった「この映画が作られた背景や意図」や、監督から新たに聞いたこと、運営メンバーでの話し合いのまとめも参考にしながら、進めていきます。

” 答えが出なくても、考え続ける場をみなさんと共につくれたらと思っています。

第2回のサロンでは、前回に続いてハブヒロシさんにオンラインで参加いただき、『音の映画 Our Sounds』の鑑賞体験を参加者と振り返りました。

「前回のサロンのことについてずっと考え続けている」という参加者たちが、その大きな体験を個々の観点で少しずつ言語化していく中で、「『音の映画』とは一体どのような作品だったのか」が次第に立ち上がっていきました。また、環境設定としての情報保障の面も重視しつつ、「その作品にとっての」アクセシビリティとは何かを考えることや、「その場」に集う人たちにとっての」楽しみ方を模索することは創造的な行いであり、その際のアクセシビリティはコミュニケーションやエンターテインメントの面もある、などの話題も展開しました。終盤では、「思いを発端とする取り組みを持続的な営みにしていくにはどうすればよいか」「社会の基準を底上げするためには何ができるか」など、今後のサロンに向けたテーマも生まれました。

このレポートではその様子を抜粋、編集してお伝えします。

(構成・文：舟之川)

プロジェクト運営メンバー 平塚千穂子 (シネマ・チュプキ・タバタ代表) / 石井健介 (ブラインド・コミュニケーター)  
舟之川聖子 (コーディネーター) / 吉川真以 (コーディネーター)

## 劇場とは何か

石井：ハブさん、前回のサロンで『音の映画』を上映してみて、どうでしたか。

ハブ：2つあります。1つは、映画って演劇と比べるとライブ性が低いメディアだと思われがちですが、この映画に関しては違う。映像がないぶん、上映する環境、誰と観るか、自分のコンディションなどが影響することがわかりました。そういう意味でかなり繊細な映画だし、パフォーマンス作品として考えるほうがいいなと思いました。もう1つは、この映画を観る目的や、映画に関する最低限必要な情報を共有した上で、上映をスタートするのが大事だったということです。僕自身もわかってないところが多い映画なので、上映するときは常に自分も絡んで文脈づくりをする必要がある。偶発的に面白くもなるし、悪い効果をもたらすかもしれない両面性がある作品なので。でも失敗しても、それはそれで気づきがありますね。

石井：まさに。「音だけの映画を、視覚障害や聴覚障害のある方々と一緒に楽しむにはどうしたらいいだろう」という、純粋な好奇心から企画したのですが、大切なものを見失っていたと感じました。

平塚：前は、見えて聞こえる人、見えなくて聞こえる人、見えて聞こえない人など、いろんな立場の人がいる中で、「感想を自由にどうぞ」という形だったから、それぞれが一番面白かったことや印象に残ったことを無作為に語ったことで違いが如実に現れた。ある程度、「こういうところの感想をお願いします」と方向づけをしていけば、もう少し話題の整理ができて、もやっとした感情も生まれにくかったのかも。進行ができたこともあったかなと思います。

ハブ：いろんな立場の人というところでは、映画の舞台になった高梁市<sup>たかはし</sup>で上映したときには、薄暗い中でやったんですが、けっこう赤ちゃん連れの方が観に来てくれたんですね。赤ちゃんが泣いたらあやしながら観ていた。通常の映画館や普通の映画だったら入りにくい人が入れた。この映画を届けられる人は限られている一方で、そういうことも起こる。だから、全員は入れないけれど、その都度工夫して、「観たい」とい

う気持ちをどうやったら大切にできるかが大事なのかも。チュプキさんで、何かこういうことに関しての事例があったら、聞きたいです。

平塚：そうですね……まず、経営難などで各地の劇場が閉じていく中で、わたしも映画館で映画を観る価値ってなんだろうと考えています。それから、前回のアンケートで、「ろうの方が別の空間で楽しむしかなかったのが、ショックだった」と書いてくださった方がいて、考えさせられました。もともとわたしたちと関係性のある方で、進め方も説明して、納得の上で参加されたのですが、他の方々への説明は十分ではなかった。ただ、暗闇の環境だったら、バリアフリー字幕もないし、手話通訳も見えなくて、その方にとっては情報が得られない。同じ時間帯に別空間で観ていただいたのは、ライブ配信に近いとも言える。今このとき、一緒に観ている。とはいえ、同じ空間で味わえないのは損失でもあるし……。

この流れで思い出したことがあります。難病のためにずっと同じ姿勢で座っていることができないから、途中で寝転がりたいという方がいらっちゃって。知恵を絞って、「2階にシアターと同じ大きさのスクリーンがあって、音はシアター仕様ではないけれども、寝転んで気兼ねなくご覧になれますよ」と提案したら、ぜひそれをお願いしますと。そこで同じ時間に上映をスタートして、終わった後はシアターと一緒に舞台挨拶を観ていただきました。それが大変喜ばれたんですよ。「同じ病気の仲間たちがいるから、天井にスクリーンがある、プラネタリウムみたいな映画館があれば」ともおっしゃっていて……。やっぱり「想い」なんじゃないかな。観たいという気持ちを汲んで、周りと一緒に鑑賞できる方法を探っていく。



オンラインで参加するハブヒロシさん

## 映画とは何か

石井：みなさんからもご感想をぜひ。

---

**参加者 a**：この場所（ユニバーサルシアター）で観ると、どうしてもアクセシビリティという観点で受け取ろうとするんですが、僕は、あの映画はドキュメンタリーの試行錯誤の歴史という視点で見たほうが理解しやすかったです。たとえばこれをラジオでそのまま放送したら映画と思うのか。逆に、ラジオのドキュメンタリー番組をこのチュプキで上映したら、我々は映画と思うのか……。そんなふうに「映画とは何か」という枠組みに揺さぶりをかける作品なんですよ。だから、いきなりアクセシビリティについて話すのは盛りすぎだったのではないかと（笑）。その上で監督にお聞きしたいのですが、この作品は「映画」だと思われませんか？

**ハブ**：「映画」だと思いますね。僕は映画とはイメージだと思ってます。自分の中に立ち現れてくる神話とか人生、そのイメージが映画なのではないか。もっと言うと、光を映したものが映画じゃなくて、自分の中で発した光が映画なのではないか。実際、同じ映画を観ていても、みんな違うものを見ていますよね。人生がそうであるように。

**参加者 a**：「映画館で多くの人と暗闇の中に身を置いて観ることが映画鑑賞の根源的な楽しさだ」という意見もありますよね。『音の映画』もやはり映画館でかかるのが理想的なのでしょうか？ それとも自宅で灯りを消してヘッドフォンで聴くのもよいのか？

**ハブ**：作品と出会って、自分自身が変わっていく一連の体験が映画なのかなと思います。今のこの場のように、見たものについて話したくなる力が映画にはある。だから『音の映画』は、みんなで集まって感想を言いながら観てもらって、出会いのきっかけになっただけかなと思ってます。アメリカに住んでいる方から、「聞きたいからデータを送って」と言われるんですが、ただ聞いているだけだと、全然映画的な体験にならないんですよ。だから最近では上映に際しての指示書を渡しています。「鑑賞の際は静かな環境で、なるべくいい音響で、できれば観た感想を誰かとシェアしてください」とか。この映画を大切にしてほしいん

です。これは僕の作品じゃなくて、出演者みんななどの作品だから。もちろん観る人も大切にしたいです。

## ユニバーサルとは

石井：もしかしたら場を整えて上映する、そのプロセスに意味があるのかもしれない。

---

**参加者 b**：先ほどのチュプキの2階でのエピソードはすごいなと思いました。僕は今映画館を作ろうとしていて、いろんな人が来られる場所を、限られた空間や資金でやるにはどうしたらいいかを考えています。僕が考えたのは、余白をいつも作っておいて、対応できるようにすること。「今、その人」との関係性の中で、自分が出来ることはなんだろうかと考えられるような余白。それがユニバーサルにつながるのかな。「これがユニバーサルだ」という正解があるわけではなくて、やろうとしている人間がユニバーサルになっていかなきゃいけないんだなと、お話を聞いて感じました。

**参加者 c**：アクセシビリティについて考えたとき、勇気のようなものが必要ではないかと思いました。実は今日、ここに来るのがちょっと怖かったんですよ。前回のサロンで丸裸にされたような気がして。それはきっと自分が誰かを傷つけたり、自分自身が傷ついたりしたくないから。でも、何が当事者にとって失礼なのかは、コミュニケーションを通してじゃないとわからないと思うので、そういう意味での勇気が必要だなと。あと、鑑賞スタイルの話では、それぞれで観て、そのあとに集まって感想を話す場があれば、それもユニバーサルと言っているのかもしれない。いろんな鑑賞の仕方があることによって、その映画の素晴らしさがより実感できるかもしれないなと思いました。

## 観てほしい、観たいから

石井：僕が途中で視力を失う前は、やっぱり目が見えない人とどういうふうに接したらいいのか、わからなかったんですよ。

平塚さんは、コミュニケーションの点で何か気をつけていることはありますか。

---

**平塚**：知らないからこそ無邪気な発想をしてしまったり、傷つけてしまったりするのは当然で、そこからいろんなことを知っていくんだと思います。傷つけないようにと気を遣いすぎること、かえって距離を生んでいるかもしれないし。難しいことは考えずに、「楽しいものは一緒に楽しみたい！ 感動したことは伝えたい！」という、自分の気持ちに正直であることが一番じゃないかな。音声ガイドで観ている方の中にも、最初は「映画を音だけで楽しめるの？」と思っていたけれど、半ば強引に誘われて来て、実際に鑑賞したり、他の人の映画愛にあふれる話を聞いたりするうちに楽しくなってきたという方もいます。

**ハブ**：正解はないし、その都度、場や人間関係を動的に作っていかなくてはならない。でもそれは生きている人間しかできないことで、すごく生きている甲斐があることですね。大胆になったり繊細になったり、矛盾するものが同居しているのが命という感じがします。鑑賞方法もいろいろ考えられそうですね。インドネシアにガムランという影絵芝居があるんですが、これが面白くて、スクリーンのどちらからでも見られるんです。演奏側からも、人形側からも。だから映画も、ある側では映像が見えて、反対側には字幕が見えるとか、見る方向が分かれた空間が作れば、一緒に観られるかもしれない。それでも入れない人は出てくるけど、それは出会いの中で、「この人に観てほしい」という相手が現れてきたときに、対応できるかどうかを考える。先ほどの天井にスクリーンをつける話にも通じますが。

**平塚**：また思い出したんですけど。盲ろうの方がどうやって映画を観るのか。サポーターの方から聞いたんですが、15分ごとに映画を止めて通訳して、それを繰り返しながら観ているんだそうです。そのサポートはもちろん大変なだけ、それでも観たいというご本人の気持ちに応えたい、ということでやってらっしゃる。さっき、空間が違って一緒に観られるという話がありましたけど、鑑賞が同じ時間帯で終わらない方もいるんだなと思って。でもそれでもなんとか映画にアクセスしたいという想いがすごいなと思って。映

画とは何か……。やっぱり余白って大事ですよ。いろんな人が自由に考えられる余白を残す。その柔軟さが物事を面白くしていくし、いろんな人が生きやすい世の中をつくっていくんだと思います。

## 情報保障の義務化を考える

**石井**：来年4月から義務化される情報保障の話で言えば（改正障害者差別解消法における事業者の合理的配慮の義務化）、たとえば視覚障害者にもいろんな人がいるから、「見えない人には音声ガイドをつけておけばいい」という話でもないんですよ。

**平塚**：うちの夫とかね（笑）。映画を観るときに音声ガイドを使わないんですよ。家でテレビを見ていても、ガイドしなくていいって言われます。当事者はいろいろなのに、ざっくりしたイメージや偏見でひとくくりにしたり、マニュアル的に「義務だから、とりあえずこれをやっておけばいい」という簡単な答えを求めてしまわないか、気になります。

**石井**：当事者とコミュニケーションをとらずに仕組みが作られることが怖い。視覚障害者、聴覚障害者、車椅子ユーザーなど、いわゆるマイノリティの方々を傍において、「やりました」と言う。その関心の矢印は当事者ではなくて、作った自分たちのほうに向いているんじゃないか。そういうのは当事者から敏感に察知されるし、それによってダメージを負う人が増えてしまうから、本末転倒なんですよ。

**参加者 a**：最近僕は、前回のサロンにも来られていた、アメリカで障害学を学ばれていた方と話していて、アクセシビリティを人権の問題として考えたらクリアになるなと思いました。人権の問題と考えれば、具体的に何が足りないのか、何か必要なのが見えやすくなるし、石井さんもおっしゃったように、情報保障したら終わりではないとわかる。それと同時に、ユニバーサルやアクセシビリティの話は、どうしようもなく政治や経済の話でもあるということ、僕はこの

サロンを通じて扱っていかなくてはいけないとも思っています。

**ハブ：**こういう小さい場では大事にできることを、そのまま大事にしながら、社会のシステムを作っていく方法はあるのでしょうか？

**参加者 b：**それはたぶん、人間社会でもう何百年も繰り返してきた問いですね。僕もこの問題は、政治や経済のことから切り離せないと思います。それに向き合うには、まず「この世界は自分が見ている主観だ」ということをきちんと受け入れて、そして人間の数だけいろんな主観があるということを知る。そこからしか始まらないと僕は思います。その基本から考えれば、「何かをすれば何か良くなる」という単純なことではない。でも、さっき平塚さんがおっしゃったように、自分の心に正直でいることで、人との関わり合いが繋がり、自分に変化する。その繰り返しのなかで徐々に変わっていく。どこかで何かの反応が起きて、「こういう仕組みを作ろう」となるのが理想なのかな。



コメントする参加者

## 楽しくつながることから

**石井：**平塚さんは20年以上音声ガイドの制作に携わってこられて、社会の仕組みを変えることについて、どう考えていますか？

---

**平塚：**わたしはトップダウンで変えるっていうやり方がわかんないんで（笑）。これが楽しい、これが大事と思う人を増やすしかないと思って、草の根でやってきました。自分の目の前にある、分かる範囲で一つひ

とつ、こうだったらいいのと思うことをやってきた感じなんですよね。

2001年にCity Lights（バリアフリー映画鑑賞推進団体）を立ち上げたのも、障害者の人たちとの出会いが少なかったから。どうしてこんなに出会いが少ないんだろうと。自分が知っている世界は、実はとても不自然だということに気付かされた。だからまずは出会いの入り口を作ったり、出合いやすくするための鑑賞会を開いた。その出合い方も、サポートという立ち位置からだと、さっきみたいに「傷つけてはいけないから」勉強して、さあ関わらしましょう！ というふうになってしまう。そうじゃなくて、「初めての人、大歓迎」にして。逆に「ベテランの視覚障害者が誘導の仕方を教えますので、安心してご参加ください」と言ってボランティアを増やしたり。ボランティアも社会貢献も全く縁はないけれども、映画が大好きなんですという方たちにどんどん関わってもらって、固定観念を外して、楽しくつながっていく人を増やしてきた。その中で、広げるためには政治的な戦略も必要だからと働きかけてくれていた人がいて、それで今みたいに、音声ガイドも字幕も普及してきたんですよね。

さらにチュプキという常設のユニバーサルシアターで、いつでも出会える場を作っている。ここに来るといろいろな人に出会えるじゃないですか。そこに何か特別なことが起こらなくても全然いいんですよ。盲導犬が、あれだけ爆音が鳴っていても、吠えずに静かにしていた。その様子を目の当たりにしたという経験を持ち帰るだけでもいい。見えない人が劇場のスタッフと映画の話ですごく盛り上がっていたのを通りすがりに聞くだけでもいい。ここに来れば、今までとは全然違う人口比で、違う世界を垣間見て帰ると思うんですよ。そういう経験をする人を増やすことでしか、わたしは社会を変えられないです。

## ブレーキを踏む感覚を持ちながら

**石井：**制度が変わることについては、どう思いますか？

---

**平塚**：わたしはスローガンや義務で行動を変えるタイプではなくて、その人の内側からやりたいと思うことや喜びが発動して思考が生まれて、やり続けていくことが、人も変えるし、力があると思っているんですよね。だから、「こうしなければならない」で人を動かしていくのはちょっと懸念する気持ちがある。ただ、せっかく義務化になるのなら、音声ガイドにも字幕にもこんな価値があるんだ、こんなに面白いんだと知ってもらえたらと思うし、そういう人たちが増えるきっかけになればと思います。ただ、それを単にビジネスとして扱うと流行で終わってしまうのもったいないし、がんばって取り組んできた人たちが利用されるのもよくない。面白さってエスカレートしやすいから、行きすぎてもどうかと思うし……。

さっき映画館の価値の話をしていたときに、映画館という場所が、作品を大切に作る装置にもなっているんだなと思いました。この感覚を大事にし続けて、踏み越えないということかな。時間の使い方にしろ、プロセスの丁寧さにしろ、ビジネスだからといって速さを要求されたときに、立ち止まってブレーキが踏める感覚を持っていたい。そのためには、常設の映画館という間口の広いところでやり続けながらも、ユニバーサル上映について知る機会をつくるとか、機会を作ってもらえるように働きかけていくことも大事なんだろうなと思います。

**ハブ**：僕も、ビジネスも大事だと思う一方で、ギブアンドテイクじゃなくて、ギブだけの関係性もいいなと思っています。不思議と人間はお金をもらうと本気にならないという事例もあって、「あげる」という気持ちのほうが根太く続くということも起こる。こういう映画って儲かるものじゃないけど、お金に代えがたいものが生まれまくっている。それも財産だと思います。僕はこれから大学で社会疫学の研究に関わるんです。これまでと一転して、マクロな観点からの物事と健康との因果関係について、定量的にエビデンスを作る学問なんです。たとえば地域における格差が人々の健康にどう影響を与えるかとか。「分断が進んでいる」ことを感覚的な言葉ではなくて、実際どういう健康影響に表れているかをデータで示すという……。

**平塚**：ユニバーサル上映がどれだけ健康に良いかとか（笑）？

**ハブ**：まさに、まさに！ いやほんとそれ大事で。アートを用いて孤立を防ぐプロジェクトなども進んでるんですよ。今後も何かで一緒できれば。

石井：ハブさんの映画のおかげで、2回かけてじっくりと語り合うことができました。運営のメンバーとも、「このサロン思ったよりヘビィだね」と話していて（笑）、今後は楽しみです。ハブさん、みなさん、今日はありがとうございました！

（終）

（構成・文：舟之川聖子）

